

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第8回 第3.2.2節～第3.2.4節

2018年4月15日

小田 勝

前回新設した「3.2.2' XはXなり」の後に、もう一つ節を新設する。

---

## 3.2.2" 限定の意を表す「なり」(新設)

「なり」だけで「のみなり」の意を表すことがある。

- (1) 我が背子を<sup>ま</sup>来ませの山と人は言へど山の名<sup>なり</sup>らし君も来まさず (人麻呂集・正保四年版本)
- (2) 水まさる千曲の川は<sup>我</sup>ならず(=我ノミナラズ)霧も深くぞ立ちわたりける(堀河百首)

次のような「…ならでは」は「…以外には」、「…ならず…も」は「…のみならず…も」の意を表す。

- (3) 木の葉に埋もるる<sup>かげひ</sup>筧の雫<sup>なり</sup>らでは、つゆおとなふものなし。(徒然11)
- (4) 花<sup>なり</sup>らず月も見おきし雲のうへ(=宮中)に心ばかりは出でずとを知れ(二条院讃岐集)〈詞書「二条院の御時、月明かりける夜、よもすがら南殿の花御覧じて、…」〉

---

82頁「3.2.3 活用語を受ける「なり」」では、中古の「なり」が現代語の「のだ」に似ているとしたが、両者の比較については野村剛史(2015)が詳細である。83頁用例(6)～(8)の類例をあげる。

- ・よろづの道の人(=専門家ガ)、たとひ<sup>ふ</sup>不堪(=未熟)なりといへども、<sup>かん</sup>能の<sup>う</sup>非<sup>ひ</sup>家の人(=素人)にならぶ時、必ず<sup>ま</sup>勝ることは、たゆみなく<sup>つし</sup>慎みて<sup>かる</sup>軽々しくせぬと、ひとへに自由なるとの等しからぬ[故]なり。(徒然187)

このあとに、活用語を受ける「なり」の否定形について、節を新設する。

---

## 3.2.3' ならず／ぬなり(新設)

名詞に付く「なり」の否定は、

(1) 使ひは必ずよき人ならず (枕 205)

のように「ならず」が用いられるが、活用語の場合、「<sup>?</sup>女もしてみんとてするならず。」(土佐による作例)のような形は稀であり、普通は、

(2) 何かと [蛩宮ヲ] 思ふにはあらず (源・蛩)

(3) こまかに聞こえ知らせ給ふこと多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。  
(源・藤袴)

の形が用いられる。

◆「ざるなり」「ざなり」の形の「なり」は推定伝聞である。

---

83 頁「3.2.4 助詞・副詞を受ける「なり」」では、用例(6)の「…となり」の例を追加する。

- ・水無瀬の川のわたりに、をかしき女のあるを、「迎へにやらん。ただにはあらず。歌詠みてやれ」となれば、かう言ひやる。(能因集・詞書)
- ・この国に生まれぬるとならば、嘆かせ奉らぬほどまで [侍るべきを]、侍らで過ぎ別れぬること (竹取)

第 3.2.4 節のあとに、節を新設する。

---

### 3.2.4' …なれとは(新設)

中世の和歌で、句末に置かれる「…なれとは」という表現がある(勅撰集では新古今集以後に使用されている)。「なれ」は、已然形 (§3.5) として「なり」の強意である場合(用例(1))と、命令形の場合(用例(2))とがある。

- (1) 思はずよ越えて悔しき逢坂のせきとめがたき涙なれ(=涙ナリ)とは (続後撰 847)
  - (2) 契りきや飽かぬ別れに露置きし暁ばかり形見なれ(=形見デアレ)とは (新古今 1301)
- 

[引用文献追加] 野村剛史 2015「中古の連体形ナリ—『源氏物語』を中心に—」『国語国文』84-1